

[課題演習概要]

個別最適な学びを取り入れた体育授業について：
苦手な児童も進んで取り組むことができる活動内容を目指して

野 口 空
Sora NOGUCHI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：個別最適な学び，体育，授業づくり

1 研究の目的

中央教育審議会（2021, p. 18）は，子供が「個別最適な学び」を進められるよう（中略）子供が自らの学習状況を把握し，主体的に学習を調整することができるように促していくことが求められると示されている。全ての児童が，楽しく，安心して運動に取り組むためには，上記の視点からの支援が必要不可欠になるといえる。また，つまずきや，悩みを理解し，児童が主体的に学習を調整できるようになることは，豊かなスポーツライフの実現にも繋がると考える。

現在では，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められており，そのための手段として個別最適な学び，協働的な学びが挙げられている。体育授業においても個別最適な学びを取り入れることで，児童がより主体的に授業に取り組むことが求められているといえる。

以上を踏まえ，個別最適な学びを取り入れた授業実践を行い，児童の様子や振り返りの分析から，運動が苦手な児童も進んで取り組むことができる授業づくりについて検討することとした。

2 研究の計画

今回の実践では小学校 5 年生 38 名を対象に，器械運動・跳び箱運動の全 7 時間で個別最適な学びを取り入れた授業実践を行った。データ収集の方法として，2 時間目以降の実践から形成的評価のアンケートを実施した。また跳び箱運動の苦手である児童 3 名を抽出し，重点的に見取り，支援を行った。形成的評価と授業中の言動から児童が

どの程度進んで取り組み，技能を向上させることができていたのかを分析した。

3 研究の内容

各時間の授業展開として，1 時間目ではこれまでの学年で取り組んだ跳び箱運動の内容を振り返り，教師が児童の実態を図る時間とした。

2 時間目から 5 時間目では用意された場から，児童が自分の課題に応じた場を選び練習に取り組んだ。用意した練習の場は，マット，ステージへの飛び上がり，2 連結の跳び箱，横に並べた跳び箱の間を跳ぶ活動，跳び箱と同じ高さのマット，低い跳び箱から徐々に高い跳び箱に台上前転，平均台の飛び越えである。それぞれ練習場所の意図は，ウサギ跳びやカエル跳びなどの動きを行い，顔が地面に近づく感覚に慣れ親しみ，安心して跳び箱にチャレンジできることを目指した。両足で強く踏み切り，十分な高さの跳躍ができることを目指した。2 連結の跳び箱上から開脚跳びをすることで腕を使った体の動かし方，着地の姿勢を身に付ける。横に並べた跳び箱の間を跳ぶ活動では，狭い隙間を飛び越す活動を通して，自然と抱え込んだ足が腕の間を通る動きを身に付けることを目指した。マットの高さを跳び箱と同じにし，着地位置をマットにするよう声をかけることで，恐怖心から足を抱え込んだ状態で跳び箱を越える動きができていなかった児童が，安心して技にチャレンジし，跳び箱を跳び越すことができていた。マットでの前転から徐々に高さをつけることで，台上前転としての動きに慣れ親しむ。平均台に手を着き，左右に飛び越す動きを通して，腰を高く上げる動作を自然に身に付けることである。低い跳

び箱を用いた前転では、数名の児童が低い跳び箱であっても跳び箱の堅さに恐怖をもち、取り組むことができていないという現状があったため、跳び箱にマットを被せることで苦手意識の軽減を行った。これにより、技に取り組むことができていなかった児童も挑戦する姿が見られた。

6時間目、7時間目では今までの活動を踏まえ、開脚跳び、抱え込み跳び、台上前転のポイントを確認し、テストを行った。また、テストでも補助のある跳び箱で取り組んで良いこと、失敗は途中で技を辞めてしまうことだけであることを確認し、児童が安心して技に挑戦することができることを重視した。

4 成果と課題

各時間に実施した形成的評価アンケートの質問項目「せいいっぱいぜんりよくをつくして運動することができましたか」「楽しかったですか」で構成される意欲関心の項目が、3段階評価で平均2.90(±0.07)であったこと、「自分から進んで学習することができましたか」の項目が平均2.75(±0.08)であったことから、児童が進んで活動に取り組むことができていたと考える。抽出児童については、1人の児童が抱え込み跳びで跳び箱の前で止まってしまう姿が見られたため、柔らかい跳び箱を用意し、まずはこの上に跳び乗ることから始めるように促した。その跳び箱の上に乗ることを繰り返し結果、跳び箱を跳び越えられるようになり、普通の跳び箱でも抱え込み跳びに挑戦する姿が見られた。別の児童は、抱え込み跳びに挑戦しようとする姿は見られたが、足が開いてしまい、開脚跳びになってしまう姿が見られた。そこで、横に並べた跳び箱の間を跳ぶ場での練習を提案し、足を閉じた状態でチャレンジするように促した。この場を通して足を閉じた状態で跳ぶことができるようになったが、膝が胸に近づいておらず、跳び箱に引っかかってしまう様子も見られたため、跳び箱の間に柔らかいボールを設置し、高さを徐々に上げた。その結果、膝がボールに当たらないように跳ぶことを楽しみながら練習に取り組み、膝の位置も胸に近づいた。台上前転では、また別の児童が跳び箱の前で止まってしまう姿が見られた。実態の確認として、マット上での前転をさせると、問題なく回れていたもので、低い跳び箱での台上前転を促した。低い跳び箱では手を着く所までは進むものの、手が伸びきったまま動きが止まってしまう「やっぱり怖い」と発言した。

このことから、跳び箱の質感や堅さが、この児童が恐怖を感じる要因ではないかと考え、跳び箱の上にマットを重ねた場を用意した。これにより跳び箱の前で止まってしまうことはなくなったが、踏み切る際の腰の高さが不十分である様子も見られたため、平均台を用いた練習も促した。この後、他の児童の様子を見てみるとこの児童が「先生できた」と報告しにくることもあり積極的に活動に取り組めるようになった。

以上のことから、教師が学習内容を精選するとともに、優しい場を用意し、児童自身で学びの場を選択することができるようにすることで児童が進んで活動に取り組むことができるようになったと考える。以上のことから個別最適な学びを取り入れることによって苦手な児童も進んで取り組むことに繋がる可能性があることが示唆された。

今回の研究の課題としては2つ挙げられる。1つは、児童が自身の課題に合わせて学びの場を選択できるという形を用いたが、児童が自身の課題を正確に把握することに困難さを感じていた。教師が直接支援を行った児童は、自身に適した場を選択することができていたが、時間の都合等により十分に様子を見ることができなかった児童の中には既にできている要素を繰り返し練習する姿を見せる児童もいた。その対応として本研究では、タブレットPCの導入を行ったが、機能を十分に使いこなせていた児童が半数程度であり、児童がお互いの技を見ることで自身の課題を見つけることができる支援が不足していたと感じる。もう1つは、苦手な児童への場は手厚く作れていたが、得意な児童への場が不十分であったことである。児童の1名が練習の際に危険な取り組み方をしていた。この児童アンケートの関心意欲の項目は平均2.20(±1.10)であり、活動に対する不満足感からの行動であったと推察できる。得意な児童への場として高めの跳び箱の用意や、より難しい技への挑戦を用意していたが、これらの要素では満足ができなかったと考える。

主な引用・参考文献

- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領(平成29年告示) 解説体育編. 東洋館出版社: 東京.
- 中央教育審議会 2021 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)
- https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm (参照日 2022年7月27日)